伊豆の街道

川崎長太郎

伊豆の街道

川崎長太郎

講談社

伊豆の街道

昭和二十九年三月五日　第1刷発行
昭和二十九年四月十日　第2刷発行
定価　二六〇円

著者　川崎長太郎
発行者　東京都文京区音羽町三ノ一九　野間省一
印刷者　東京都文京区関口町一四〇　盛英信
印刷所　東京都文京区関口町一四〇　慶昌堂印刷株式会社

東京都(小石川局区内)音羽町三ノ一九
発行所　株式会社　大日本雄弁会講談社
全国出版協会会員　振替東京三九三〇　電話大塚(94)三一〇一三一二一

(藤沢製本)

落丁本・乱丁本はお取りかへいたします。

PRINTED IN JAPAN

目次

伊豆の街道……[illegible]
伊豆の街道……一五
晩花……[illegible]
夜の素描……一九
色めくら……[illegible]
東京にて……二五
唐もろこし……[illegible]
落日紅……一六九
外道（げだう）……[illegible]

装幀・中島靖侃

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

伊豆の街道

伊豆の街道

花枝は、十一月から、暮へかけて一篇づつ三回、竹七の小屋へ、夫の作品を持ちこんでゐた。

彼女は、二十五歳、七つとし上の夫は勤人で、四歳に二歳の二児があり、小田原と長い橋を挾んで隣り合ふ部落に、六畳三畳二間きりの小さな家を借り、四年ごし住みついてゐた。

始めの二篇に、竹七は、文章がしつかりしてゐる点、ほめてみせた。きいて、花枝も、主人にさうと報告したら、喜ぶだらうと、顔を幾分気色ばませたが、夫の作品に対する彼女の意見は、いやに突つぱなしたやうなもの謂で、暗ッぽくつて、あまり好かないと云ふやうであつた。竹七の小説も、花枝は読んでゐたが、面と向ひ、好悪をそれとあけすけ、述べかねるやうな面持ちであつた。

三度目の、作品みたか、と彼女が竹七の小屋を尋ねたのは、暮も大分押し詰つた、夜の八時頃である。あかりといへば、太目のローソク、火鉢も火の気もない小屋の中の寒さに、竹七は丁度寝仕度にかかるところであつた。オーバーをひつかけたなり、ビール箱の机を隅の方へ片寄せ、座布団などその下へ押し込み、一畳一寸のところへ、床を敷くべく、押し入れから、敷布団、毛布、亡父母が用ゐたよれよれの羽根布団、そんなものをひつぱり出してゐた。花枝の声で、そのままに捨て置き、ローソクの火を消し、暗い階段を降りて、外へ出て行つた。花枝は、小屋の窓下に、ぽつんと立つてゐた。竹七は、粗末な贅の子の屋根を、舗道にのせる近くの商店街へ行き、一軒の甘いもの屋へとひつぱり込み、差し向ひに並んで、しるこを喰べた。三度目の作品を、彼はまだ読んでゐず、その由云ふと、花枝はさのみ不足でもなかつたが、子供が気になるらしく、帰りを急ぐやうであつた。小田原駅前から出る、バスに乗るつもりの彼女を、そこまで送るべく、竹七も一緒に歩き出してゐた。トリコットのマフラーをし、オーバーの襟を立て、猪首を余計窄むさく縮めるやうにして行く小男の竹七より、又ひと廻り小さい花枝であつた。煉瓦色したトッパー、紺のズボンに、赤皮のかかとの低い靴穿いた、一寸お寒いやうな彼女の身ごしらへであつた。肩をくつつけたり、はなしたりして、商店街の片側を急ぐ裡、竹七は奥歯の上下がすつかり抜け落ち、その為め空気の洩れる、ぼそぼそした聞きとり

にくい口つきで、いつか正月が翌々日と迫つても、餅を搗きも、買つてきもしない自分の暮し、元旦の雑煮などここ十何年喰つたためしがない等々、世間の風習の外にゐる身の有様を、日頃の彼らしくもなく愚痴り、こぼして、知らず、一緒に歩いてゐる、親と子程とし下の女の袖をひくやうであつた。きき手も、段々うつむきがちになり、鼻孔詰らせ、涙をすすり込むやうな模様となり、「元日、うちへ、いらつしつて——」などと、云ひだしたりした。その好意を謝したが、作品はみても、当の人物には、一度も接したことのない勤人の家族にはさまり、雑煮をよばれるなど、竹七には思ひも寄らない仕儀であつた。元日は、例年どほり、たべものや蜜柑を腰にぶら下げ、伊豆の海岸でも歩いてくるつもりだ、と問はず語りつけ足し、電車通りへ出る街角にきたところで、竹七は脚を止め、別れの言葉をかけた。花枝は、短かく斬つた髪を、片方の手で撫でつけながら、なまめいたやうな眼色で「左様なら」した。

正月の五日の晩、二人は逢つてゐた、三日の夜も、小屋を見舞つたが、竹七は留守で、ゐたら誘つて、酒を飲むつもりだつた、と花枝がほのめかせた口裏に、彼は小さな喫茶店へつれて行き、日本酒のつがれたコップ二つ、前に置いた。近くに、ストーヴがあり、酒のまはりは殊の外、早いやうで、半分も飲まない裡、しらふの時でも日燒けして赤い、竹七の顔は燃えるやうになつてしまひ、薄く化粧した花枝の、円い頬も可成染まり加減であつた。二人の口も調子

づき、竹七は元日、西風のはげしい伊豆の海岸を、頭からしぶき浴び浴び歩いたり、バスへ乗つて岬の鼻まで行き、海を挾んで富士を眺めたり、帰り路トンネルのある峠を越えて、ある温泉場へ辿りつき、入浴を乞うたが、旅館の番頭にふうていを怪しまれ、間もなく日が暮れて、山々が赤々と眼に沁みた等々語り続け、はずみに乗つて「あんた、ひと晩泊りで、どこかへ旅行しないか」と、花枝に云ひ出してゐた。言下に、相手も乗り気な返事をしてみせた。気をよくし「あんたと友達にならう。——友達に。いいだらう。」と竹七が畳みかけるのを「ええ。うれしいわ。先生、ゲンマンよ。ゲンマン。」と、他愛なく、肉づきのいい、白い小指を、おつ立ててきたりして、自分も旅行は大好きだが、何分貧乏世帯で、二人の子持ち故、思ふにまかせぬとかいつたりした。コップの酒が、なくなるまでには、花枝から、映画の話も出た。彼女は、不思議に、某々等、老役ばかりやる俳優を好むかのやうな口振りであつた。竹七が、二杯目を註文しかけると、「主人が——」と口ごもり、彼女はぽつちやりした、円顔の筋肉をこはばらせ、制した。では、と、竹七がココアを云つたら、今度は頷いた。

マフラーなしの、着るものも、穿くものも、前々と同じで、赤い手袋した花枝を、又バスの出発所まで送るべく、竹七は歩き出してゐた。一杯の酒の酔ひに、花枝は何かと弾みのついたやうなもの腰であつた。「先生と一緒だと、わたくし、愉しい。」と小さな声で云つてみせたり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

又「主人があつても、先生を好きになつてはいけない、といふ理由はないでせう。」と、さつき切上げどきを気にした寸法とは裏腹の、きはどいことを口にしたりした。「不届きと云ふわけもなからうが、判断の仕様だね。」と、竹七の方が、たじたじと面喰ひ加減である。「よそのひとと、交際したらいけないなんて云ふ法はない。」と、花枝は飽くまで強気な口上であつた。小田原駅の、大時計がみえるところへ来て、バスが出るまでに、十五分間あつた。では、わたくしが、そこまで送ると、花枝は云ひ、二人は多少もつれる足許で、電車通りを引き返してゐた。いつもの、癇性らしい金属性な声帯を、いつ層はじけるやうにしてみせながら「わたくしアドルムを呑んで自殺しようとしたことがありますの。——三日目に生き返つたの。」「ふーん。動機は？」「失恋。」「ふーん。で、主人はあんたが、そんなことをした女と承知の上で一緒になつたのではないだらうね。」「いいえ。そばで、ずつとみてゐたんです。主人と、わたくしは、親同志がきめたいひなづけで、子供の時から知り合つてゐたし、わたくしが、そんなまねしたわけも、十分知り抜いてゐました。」「ふーん。それを承知で、いくら親同志きめた仲と云つたつて、よくも一緒になれたものだ。——俺なんかには解らないな。」「わたくしも、だらしない女なの。」と、短かい頸根を、へし折る如くうつ向き、花枝も息を飲むふうであつた。尋常一様な、夫婦ではなかつた、とさうみてとり、竹七の女の横顔に喰入る眼が、き

ゆつと痛むやうであり、又、まぎらはしい、ケダものじみた光をつけるやうでもあつた。ふつと、二人の口数が少くなつて行つた。電車通りから、横へそれて、少しした十字路へき「さつき云つた通り。二十六日ね。都合して呉れ給へ。」「今月でしたつけ。」「さうだ。今月の二十六日。きつと都合して呉れ給へ。」「ええ。」と、合点して、花枝は赤い手袋した手で、竹七の年寄りらしく骨つぽい、体に似ない大きな手を、軽く握り、一時に酔ひの醒めたやうな足どりで、遠ざかつて行つた。「主人に、今度の小説は面白かつた、と云つて呉れ給へ。」と、とつてつけたやうな文句が、彼女をうしろから追ひかけてゐた。

十五日ばかりたち、約束の二十六日が、あと六日に近づいたが、竹七は花枝と逢つてゐなかつた。あの時は、酔つてゐた上に、もののはずみで、自分と泊りがけの旅に出ようなどと、簡単にのつてしまつたものの、家に帰り、夫の顔をみたり、二人の子供をかかへたり、何やかやしてゐる裡、女の考へが変つた、さうあるべきだ、と、竹七は見当つけてゐた。又、夫として、いはば前科を犯したことのある女を妻にしてゐる人にしろ、日帰りの旅なら兎も角、二日がかりの温泉行に、おめおめ出してやれるわけはなし、竹七の小説も読んでゐるほどの男なら、いよいよ相手が悪いと、敬遠するところだ、と思つたりした。彼の作品に丸出しな通り、知命を過ぎて、なほかたづかない生理的なものの始末に、小屋暮しの竹七は、屢々町端れの淫売窟に

赴いてをり、そこでは満たされないものの影を追ふやうに、未婚の若い女をみれば、矢鱈犬みたい尻ッ尾振り振り、そのあとをつけ廻すやうな癖もある人間であつた。そんな色乞食然とした、五十男と、妻をひと晩どまりの旅行に出せる夫などは、余程どうかしてゐる人種であり、或は、妻に隠してか、公然とか、別に好きな女と出来てゐて、世間ていや何かを計算に入れ、目下形だけの夫婦を装つてゐる、相当腹黒い輩に相違なかつた。

約束が、ホゴになるのは、正直、竹七にも掌中の玉を逸する感、なきにしもあらずであつたが、先方は仮にも人妻、いつそ指を咬へて、引下るにしくはない、と諦めかけてもゐた。一緒に出かけた先で、ひと昔前なら、法律的な罪を犯かしかねない、すぢ合のものであり、法律如何は別としても、まだ逢つたことのない夫たる人や、その二児に、顔向けならないやうな工合になつてしまつては立瀬がない、と旁〻、小心で封建的の律義なところもある竹七は、自分から持ちかけたけいくわくを、今になつては、はしたない、軽はずみだつたと悔いもした。温泉行の沙汰止みを、ひとり寝の床の中で、体を硬くしながら、祈つたりした。

二十六日に、三日前の晩、竹七は小屋の窓から「先生」と呼ぶ花枝の声をきいた。オーバーを着たなり、ビール箱の机に向つてゐた彼は、ペンをはふり出し、ローソクの火を消して、小屋から出て行つた。前、コップについだ、日本酒のんだことのある喫茶店へ、二人は這入つて

行つた。あれから、三度足を運んで、やつと花枝は竹七をつかまへた勘定で、夫である勤人も、その間一度小屋を尋ねてゐたが、竹七が寝てしまつてゐる気はひを察しとり、無駄脚のまま引返して行つた。

小さな、ストーヴの傍で、竹七は花枝へ、酒？　と云つたが、彼女は頸を振り、二人はココアを飲むことになつた。前例のない位、花枝はゆつくり御輿を降ろし、竹七がバスの時間を気にしてみせると「十一時まである。」云々と、うそぶいたりしてゐた。最初、二日間も家をあけられては、と難色を示した夫の前で、ご飯たべられるやうになつてゐる二児の世話は、夫の姪で、子供好きの娘にきて貰つて頼めばいい、と花枝が主張したところで、相手も折れ、彼女の申出を許した。東京の、さるレストランに働いてゐる姪へ手紙すると、早速承知の返事もきて、その方の心配は先づなくなつたが、子持ちの女が、子を置いて、二日も留守にして行く、隣り近所への口実にひと苦労で、それもなんとかなるだらうと花枝は云ひ、竹七が主人に逢ひ、諒解を求めることはいらないかと糺すのに、それはと彼女は顔を顰め、受けつけなかつた。ココアのお代りして、喫茶店を出、その脚で、パチンコ屋へ行かうと、花枝は促したりしたが、遊戯の嫌ひな竹七は、尻ごみし、風邪をひいては、と却つて彼女を駅の方へ追ひやるふうであつた。駅前にき、同じ場所で、翌々日の九時に落ち合ふことにきめ、二人は別れた。

翌日、彼は淫売窟へ、そのことの為め、つまづいてはなるまいと、生理的なものの始末に出かけた。馴染の女は知らぬが仏であつた。帰りがけ、銭湯に寄り、同じ人間が、白毛一本のこすまじく、いとも念入りにアゴ鬚など剃つてゐた。

天城トンネルを出、バスが停車し、「用達して下さい。」と、女車掌の声である。乗客の五六人が立ち、街道の路ばたへ行つて、立小便始めた。一人の女客は、勝手悪しといつたふうに、まごまごしてゐた。

竹七と、花枝は、予定通り、バスを降り、歩き出した。竹七は、自分で袖口あたりつくろつた、薄い小豆色のオーバー、中古品で買つた、青つぽい背広、鳥打をかぶり、あみ上げの兵隊靴穿いてゐた。花枝は、いつもと変らない、煉瓦色のトッパー、茶色のぺらぺらしたスカート、ナイロンの靴下に、かかとの低い短靴を穿き、飴色の四角な下げ鞄、梅干入れた握飯や蜜柑など一緒にした風呂敷包を持つてゐた。包は、歩き出すとすぐ、竹七にかかへられた。

かすかに薄日さす、雪か雨になりさうな空模様であつた。峠を越えて、南へくだる街道の左手は、溪間になつてをり、行く程に深く拡がるやうであつた。山肌は、すつかり霜枯れて、葉

を落した木々のたたずまひも佗しく、そこかしこに植林された杉の緑が、ひと際冴えてゐた。たまに、キ、キッと啼きながら、飛び立つ鳥影もみえた。

曲り角の、杉の根かたに、落葉のむらがり、重なるのをみつけ、花枝は嘆声発し「いいたきつけ。」と、云つたりした。二人は、枯草分けて、崖を降り、細い溪流の水を、両手に掬ひ上げ、口へ入れた。流れは、街道をくだる裡、杉の木の間に、小さな滝となつて眺められたりした。

行き違ふ人は勿論、バスやトラックの往来も減多にない、石ころだらけの道である。ひき緊つた、山の気の寒さに、竹七は時々水洟汁すすり、花枝は歩きにくがつて、ポケットへ突つこまれた、竹七の左腕に、右手を廻すやうにして行つた。

「わたくし、つくづく、子供生んだのを後悔することがあるんです。」

と、心持ち、顔をそむけながら、花枝が云ひ出してゐた。

「結婚して、三年たつても、影も形もなかつたので、わたくし、石女かしらと思つてゐたところへ出来たでせう。父始め、身うちの人も、まだかまだかと云つてゐた矢先きでしたし、主人は生活が安定してないからなんて、随分反対だつたけど、わたくし強情はつて生んだんです。それから一年目に又一人——。でも、わたくし、本当に、子がほしかつたんです。子を持つて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com